

白居易の茶詩 —— 茶詩の新しい姿

馮 艶

はじめに

李白、杜甫が生きていた盛唐時期では、飲茶の習慣がまだ定着しておらず、茶詩の数も少量であった。李白の茶詩は『答族姪僧中浮贈玉泉仙人掌茶』¹の一首のみであり、杜甫も『寄贊上人』²、『已上人茅齋』³、『進艇』⁴などの詩の中で、茶のことに軽く触れるだけであった。そしてその後詩僧と呼ばれている皎然が十数首の茶詩を作っており、その多くは宗教的な色合いの濃いものであった。白居易と同時代の詩人の中で、茶詩を比較的に多く書いたのは張籍や盧仝、劉禹錫、元稹、賈島、許渾などがいる。いずれの詩人も茶詩の数は十をこえないが、名詩となり、後世に大きな影響をもたらしたものがある。例えば、盧仝の『走筆謝孟諫議寄新茶』⁵は高踏で道教的な境地を描き、劉禹

¹ 『全唐詩』(巻・一七八)

² 『全唐詩』(巻・二一八)

³ 『全唐詩』(巻・二二四)

⁴ 『全唐詩』(巻・二二六)

⁵ 『全唐詩』(巻・三八八)

錫の『西山蘭若試茶歌』⁶は幽寂で純潔な禅茶をテーマにした。代表格の茶詩と言えよう。白居易は三千八百首程の詩が今日に伝えられており、中唐を代表する巨人詩人と言えるだろう。彼が生きた時代は茶詩が量的に増加した時代とは言え、六十首あまりが残されていることはやはり突出している。これらの茶詩の内容や特徴はもちろんその時代の共通したものを備えており、ほかの詩人達の茶詩と同じように特に禅や仏教、道教との緊密な繋がりを見ることができる。一方、その時代では珍しい新茶の贈答詩や特定の名茶に対する愛着を詠う詩、日常的な喫茶風景を描く茶詩が半数以上を占めている。敢えて喫茶を飲酒と同格に並べたり、閑適な生活の喫茶や文人趣味の喫茶を詠ったりして、「茶禅一味」と違う茶のイメージを作り上げている。次はこれらの内容について詳しく検討してみたい。

一、贈答の茶や名茶を詠う名詩

1、友情を詠う茶詩

三千八百首を超える詩の中には、『長恨歌』や『琵琶行』など広く知られている名作がたくさんある。白居易の茶詩の中でもっとも知られているのは『謝李六郎中寄新蜀茶』（李六郎中が蜀の新茶を送って来たことに謝す）⁷である。内容は以下の通り。

故情周匝向交親，新茗分張及病身。紅紙一封書後信，綠芽十片火前春。湯添勺水煎魚眼，末下刀圭攪麴塵。不寄他人先寄我，應緣我是別茶人。

（友人の細やかな愛情がこの私に向けられ、新茶が病人の手元に届けられた。赤いのしがつけられているこの茶は私の手紙の返事であり、十枚の餅茶は清明節前の早春のものである。水を一杓湯に入れ泡を煎じ、茶沫が浮き、さして黄緑の茶の葉をかき混ぜる。ほかのところよりまっさきにここに

⁶ 『全唐詩』（巻・三五六）

⁷ 『全唐詩』（巻・四三九）

届けられるわけは、この私が茶をわかる人間だと信じているからだ。)

李六郎中とは当時の忠州刺史李宣という人物である。忠州は四川省の東部に位置しており、李宣はここから江州司馬である白居易に蜀の新茶を送ったと思われる。この律詩の三、四、五、六句目は当時の茶の形や季節感、煎じ方などを麗しく描いている。贈り物なので、茶餅に鄭重に赤いのしをつけてある。「火前の春」というのは禁火の日の前の早春のことである。禁火の日は旧暦の四月五日前後の清明節であり、寒食節とも言う。春秋の時、晋の賢臣介之推が山中に隠居したので、晋文公は彼に出てもらいたいため山焼きをした。結局介之推は焼死した。晋文公は彼の死を悼み、その日に火を起こして食事を作ることを禁じるようにした。このことが寒食節の由来となった。「火前春」というのは早春に採れる蒙頂茶のことである。蜀の蒙山がその産地であるため蜀茶と呼ばれている。採れたての新茶が様々な工程を経て、茶餅に作られ、送られてきたわけである。沸いている湯に水を一杓入れ、湯の中にある茶の粉末がより豊かな泡を立たせるためにさしでかき混ぜる。これは陸羽が『茶経』の中で主張している煎茶法と同じである。そして最後に自分が「知茶人」であることからほかの人より早く新茶が送られてきたと詠う。自分が茶のことがわかるということを知っている友人こそ、茶の達人であり、自分の「知音」であることを暗に誉めて、新茶のお礼を述べた。二句目と三句目の綺麗な対句と七句目と八句目の瀟洒な結句がこの茶詩を有名にした。

次の詩も友人を思いながら煎茶する名詩である。

山泉煎茶有懷 坐酌冷冷水， 看煎瑟瑟塵。 無由持一碗， 寄與愛茶人。

(山の泉の水で茶を煎じ、感ずることがあり 地に座り、さらさらと流れている泉の水を汲んで賞味し、黄緑色の茶の粉末を煎じる釜を見守る。なぜか一杯の茶を用意し、茶を愛する友人のために置く。)⁸

山の中に煎茶に適する泉を見つけ、その近くで茶を煎じることにする。澄

⁸ 『全唐詩』(巻・四四三)

み切っている水はさらさらと流れ、茶を頂く前に思わず泉の水を飲んでしまった。泉の水の美味しさを描く。そして、沸いている湯の中に黄緑色の茶末を投入し、注意深く見守る。当時の茶のほとんどはいろんな工程を経て固形に仕上げられるものであり、細かい粉になるように臼で挽いて使う。というわけで、よく「塵」という文字を使って茶の粉末を形容する。美味しい泉の水できめの細やかな茶末を煎じれば、絶品の茶が出来上がる。が、すぐにじっくり賞味することはせず、なぜか一杯目をわざわざ取り出して置いた。それは自分と同じく茶を愛する友人のためにとってあるものである。茶のことをよくわかっている、茶に対しての価値観を共有することができる友人と一緒に美味しい茶を賞味することはなにより楽しいことであろう。「謝李六郎中寄新蜀茶」の詩では、自分が「別茶人」であると思ってくれる友人に感謝と感激を述べ、この詩では自分の「愛茶人」である友人への思いを綴った。

他に、『睡後茶興憶楊同州』⁹ の中では、煎茶の環境と煎茶の過程に対する優美で細かな描写の後、「盛來有佳色，咽罷余芳氣。」（茶碗で汲み、奇麗な色が際立ち、飲んだ後も香りが長く残る）の句で茶の色と味を絶賛した。そして最後に、「不見楊慕巢，誰人知此味。」（友人の楊慕巢がここにいなければ、この茶の良さをわかる人がいないであろう）の句で一緒に茶を賞味したい思いを遠方の友人に訴え、詩を締めくくった。そして、題を『晚春閑居楊工部寄詩楊常州寄茶同到因以長句答之』（晩春にのんびり暮らしている時、楊工部が詩を贈り、楊常州が茶を贈り、同時に着いたので、この詩をもって返事をする）¹⁰ とする詩の中では、白居易が「閑飲工部新來句，渴飲毗陵遠到茶。」（余暇、楊工部の新詩を詠み、のどが渇く時、遠く毗陵にいる友人が送って来た茶を飲む）の句を用い、友人達に贈り物の礼を言っている。新詩は友情を詠うものであり、茶も誼みの現れである。

当時の茶詩の世界では、茶はもともと「純潔」や「脱俗」の宗教的な色合いを持っている。これと同じように、文人たちの処世法も高潔さを好む傾向がある。そこで、茶の品格のあるイメージが重視され、贈答品として茶は中唐以後増え続けた。茶を贈り合いし、共通した茶に対しての愛着と茶の味に

⁹ 『全唐詩』（巻・四五三）

¹⁰ 『全唐詩』（巻・四五四）

対しての知識が友情を育み、深め、文人と文人の新しい付き合い方となった。さらに、茶詩を作る材料を提供することにもなった。特に宋に入ってから、茶をテーマにする贈答詩の数が歴大になり、白居易の贈答茶詩がその始まりと言えるだろう。

2、名茶を詠う茶詩

白居易による茶名を出して書いた茶詩の中で、主に蒙頂茶や蜀茶の二種類の茶の名前がある。白居易が愛飲しているものと思われる。

まず蜀茶を詠う詩を一首取り上げてみよう。

蕭員外寄新蜀茶 蜀茶寄到但驚新， 渭水煎來始覺珍。 滿甌
似乳堪持玩， 況是春深渴酒人。

(蕭員外が蜀の新茶を送ってくれた 送られてきた蜀茶の早さにただ驚くばかり、渭水を汲んで煎じたあとやっとその貴重さがわかった。茶碗に一杯の乳色の茶の華を長らく眺め、春も深くなり、酒のあと、のどが渴くこの時にことさら美味しくみえる。)¹¹

送られて来た蜀茶の美味しさが段階的に伝わるようになっている茶詩である。まず、新茶が早春のこんな早い時期に送られて来たことに対しての驚きを描く、これが旬のものに対しての一番目の感動である。それから、茶を入れる名水と言われている渭水で新茶を煎じ、茶の華がいつもより増して雪のような泡が立った。泡沫の多さと白さは茶の質の良さを物語っている。これが新茶に対しての二番目の感動である。そして三番目の感動はその茶を飲むタイミングである。うららかな春の日に、酒をのんだ後であり、喉が渇き、すっきりしたいと思っている時、茶碗にいっぱい白い華が立っている蜀茶は一層美味しくみえる。茶は友人から送られて来たものであり、名水と言われている渭水で煎じられ、春の日の酒の後のタイミングに飲む。これらのすべ

¹¹ 『全唐詩』(巻・四三七)

ての要素が新茶の蜀茶の貴重さを強調している。

そして次も大変有名な茶詩である。

琴茶 兀兀寄形群動内， 陶陶任性一生間。 自拋官後春多醉，
不讀書來老更閒。 琴裏知聞唯《淥水》， 茶中故舊是蒙山。 窮通行止長相伴，
誰道吾今無往還。

(琴と茶 勤勉に働き、社会の中で生活し、また気ままに振る舞い、一生を終わらせる。官職を辞めてから、春に酔う日が多くなり、読書もせず、余暇を持って余す老後である。琴の曲を聞けば、名曲の『淥水』しかわからない、愛飲しているのは蒙山の蒙頂茶である。人生は行き詰まったり、順調だったりすることが常であり、今日となつてつきあいがいなくなることは誰が知っていたらうか。) ¹²

一句目と二句目は「仕」と「隠」の間を楽しんでいる白居易の自画像である。重要なポストにつくことができる時は、「良吏」として勤勉に国や民のために奉仕する。閑職であったり、官界から離れていたりする時は気ままに暮らし、束縛のない穏やかな日々を楽しむ。三句目と四句目は年を取り、退職してからの白居易の生活が一層閑適の方に傾き、酒を飲み、余暇を楽しむ老人の姿を描いている。そして、詩の中心となっている名句は「琴裏知聞唯《淥水》， 茶中故舊是蒙山。」である。まず、『淥水』は古曲であり、名曲でもある。そのため、琴で演奏されると、白居易も聞きわけることができる。しかし、音楽の名曲はいくらでもあるのに、どうして『淥水』だけが挙げられたのであろう。それは大の酒好き白居易ならのチョイスである。「淥」という言葉は澄みきるという意味を持っており、清酒のことは当時「淥酒」と呼ばれていた。李白の『前有樽酒行 其一』では、このように詠っている。「春風東來忽相過， 金樽淥酒生微波」(東からの春風は忽ち吹き過ぎて行き、金樽にたたえられた淥酒もかすかな微波が立つ)。従って、音楽のことを詠っているが、暗に自分の好きな酒のこともアピールしている。その「淥水」の対として、蒙山の蒙頂茶が持って来られた。蒙頂茶については、茶書に記載がある。

¹² 『全唐詩』(巻・四四八)

五代十国の毛文錫の『茶譜』¹³の中で、このように記されている。「蜀之雅州有蒙山、山有五頂、頂有茶園・・・・」(蜀の雅州には蒙山があり、その山は五つ峰がある。それぞれの山頂には茶園がある。・・・)蒙頂茶も前文に出ていた蜀茶と同じく、白居易が一筋に愛している茶である。それを名曲の「渌水」と並んで取り上げられていることはやはり二者の共通点に理由があるのだろう。音楽鑑賞や飲酒などは日常生活の営みでありながら、文人が自分の雅さや風流を標榜したり、エンジョイしたりする手段でもある。そこで、白居易の場合は、更に飲茶が加えられた。茶の起源地のひとつは蜀であると言われているので、蜀の茶の味はどうであれ、イメージが古風であり、文人たちが求めているものを持っている。

このように、中唐以後は飲茶習慣の流行に伴い、具体的な茶名を挙げる茶詩の数が増え続けた。白居易の次に、薛能の『蜀州鄭使君寄烏觜茶因以贈答八韻』や『謝劉相公寄天柱茶』、秦韜玉の『紫筍茶歌』、徐夤の『尚書惠腊面茶』などがある。これらの茶詩は特定の茶の産地や特徴を詠い、茶詩の内容を豊富にした。宋の茶詩は故郷の茶を心から愛し、その美しさと美味しさを謳歌するものが新たな流れとなって現れた。例えば、黄庭堅が故郷の双井茶を詠う『雙井茶送子瞻』の詩が名作になり、陸游も『三游洞前岩下小潭水甚奇,取以煎茶』の詩の中で、「囊中日注傳天下、不是名泉不會嘗。」(天下に名が知られている日注の茶を持ち歩き、有名な泉の水でなければそれを試すことはしない)の句があり、故郷の茶を如何に大事にしているかが窺える。飲茶活動を描写する茶詩は具体的な茶名を出すことによって、詩の内容や茶のイメージがより具体的なものとなり、より広い視野で茶を見つめることができ、文人茶が表現しようとしている精神世界の内容を色豊にしたと言えよう。

二、閑適詩の中にある飲茶

白居易の江州司馬時代、自ら自分の詩作を編集し、全部の作品を四つの種

¹³ 原書はすでに逸失、資料は宋の『太平環宇記』より

類に分け、「閑適」詩も重要な部類のひとつであった。そして、それ以後も彼は閑適詩を書き続けた。これらの閑適詩が作られた背景については、『白居易における仕と隠』¹⁴ がこのように指摘する。「ところで白居易は、貞元十六年に科挙の進士科に及第、引き続き同十九年に制挙の書判拔粹科に及第して秘書省校書郎を授けられた三十二歳の時から会昌二年に七十一歳をもって致仕するまでの四十年間、一貫して唐王朝に仕える官僚でありながら、官僚たるものに要求されるべきはずの兼済の立場をみずから放擲することは、いかにして可能なのか。その点をいかにして自分の納得させることができたのであろうか。ここにおいて白居易に想到されたのが、「吏隠」なる観念であった。「吏隠」とは「吏」すなわち官僚としての生活と「隠」すなわち隠棲者としての生活の一体化であり、ないしは「吏」のなかに「隠」棲をし、「吏」を「隠」棲の場所とすることを意味する。」閑適詩はこういう人生観の表れと言えよう。

1、日常生活の中の飲茶

無欲無心の生活観を表わす詩は白居易の詩の部類では閑適詩の部類に属す。閑適詩のなかで茶のことに触れたりする詩を暫く閑適茶詩と呼ぶことにしよう。まず、日常生活の茶或いは日常活動に同化された茶のことを描く閑適茶詩をとりあげよう。

即事 見月連宵坐， 聞風盡日眠。 室香羅藥氣， 籠暖焙茶煙。 鶴啄新晴地， 雞棲薄暮天。 自看淘酒米， 倚杖小池前。

(即事 起きて月を見る夜は幾つも連なり、昼は風の音を聞きながら一日中眠る。部屋の香りは薬の匂いも入れ込み、茶の葉が入っている籠を温め、茶の煙が出る。雨が上がり、鶴は外で餌を探し、日が暮れ、鶏はねぐらに帰る。酒造りの米を洗う様子を見に行き、杖を使い池の前までやってくる。)¹⁵

¹⁴ 吉川忠夫著作『白居易研究講座第一巻』より

¹⁵ 『全唐詩』(巻・四五〇)

最初はのんびりしている毎日の生活を描く。月を見るため夜は遅くまで起きていたので、静かな昼は外の風の音を聞きながら一日中寝る。三、四句は養生を大事にしている白居易の日常である。丁寧に葉を煎じたり、茶の葉を炙ったりする毎日であるので、部屋中に葉の匂いや茶の香りが漂う。そして、飼われている鶴も鶏も主人と同じように自由自在に庭でくつろいでいる。自家製の酒のために、米を洗う。その工程の監督もしている白居易である。月を見ることや風の音を聴くこと、葉を煎じること、茶を炙ること、鶴や鶏の世話、酒造りの見定めなどなどがすべて平凡な日常であり、白居易が淡々とこなしている営みである。飲茶もそのなかのひとつであり、特別なものではなかった。

同じ内容のものをもう一首あげよう。

營閑事 自笑營閑事， 從朝到日斜。 澆畦引泉脈， 掃徑避
蘭芽。 暖變墻衣色， 晴催木筆花。 桃根知酒渴， 晚送一甌茶。

(雑事を営む 毎日雑事で忙しい自分を自分で笑い、それは朝から晩までずっと続く。泉の水を引いて菜園にやり、蘭の芽に気をつけながら小道を掃除する。気温が暖かく、土壁の色が変わり、晴れている天気は木筆の花を開かせる。侍女は酒の後、喉が渇くことを知り、夜、一杯の茶を持ってきてくれる。)¹⁶

この詩は春の暖かさを感じながら庭の仕事を一日中することを描いている。野菜や花にやる水は清らかな泉の水を用い、蘭が生えているところは小道も作ってある。一日の仕事を終え、満足感と疲労感を味わいながら酒を飲む。そして夜は喉が渇いている時、侍女が美味しい茶を持ってきてくれる。「桃根」は王献之の妾の「桃葉」の妹の名前といわれているが、ここでは白居易の世話をする侍女を指す。時間の余裕と心の余裕があるからこそ、こういう充実した楽しい日常を雑事と呼びながら楽しんでいる。

そして、僧侶を自宅へ招く詩も白居易の場合は違う内容となっている。

¹⁶ 『全唐詩』(巻・四五四)

招韜光禪師 白屋炊香飯，葷膾不入家。滬泉澄葛粉，洗
手摘藤花。青芥除黃葉，紅薑帶紫芽。命師相伴食，齋罷一甌茶。

（韜光禪師を招く 白家は美味しいご飯を作り、なまぐさいものは一切使わない。葛のつくりをきれいな泉の水で固め、手を洗い、藤の花を摘む。青いわさびの黄色い葉を除き、紅生姜は紫の芽が出ている。禪師の命で食事の伴をし、食後は一杯の茶を頂く。）¹⁷

茶詩のなかでよく描かれている茶をもって僧侶を招待する光景ではなく、精進のごちそうで禪師をもてなす。食事の準備に使われている食材の名前はずらりと並んでいて生活感が漂っている。食事の内容と同じように禪師と白居易が飲んでいる茶も日常生活なかの茶である。

2、無心の飲茶

自分の人生観や生き方について白居易はこのように述べている。

詠意 常聞南華經，巧勞智憂愁。不如無能者，飽食但遨遊。
生平愛慕道，今日近此流。自來潯陽郡，四序忽已周。不分物黑白，
但與時沉浮。朝餐夕安寢，用是為身謀。此外即閑放，時尋山水幽。春
遊慧遠寺，秋上庾公樓。或吟詩一章，或飲茶一甌。身心無一系，浩浩
如虛舟。富貴亦有苦，苦在心危憂。貧賤亦有樂，樂在身自由。

（考えを詠う 南華經の説法をよく聞いているが、よく働くものや知恵のあるものは憂いが多い。無能である方がましであり、飽食してただ遊び歩くだけである。普段から道教への憧れがあり、今はやっとそれに近づくことができた。潯陽郡に着任し、あっという間に四つの季節が入れ替わった。物事の白黒を分別せず、ただ時に身をまかせるだけであつた。朝に起きて食事し、夜にぐっすり眠り、これは全部健康のためである。ほかの時間は自由自在に行動し、時々山水のきれいところを散策する。春は慧遠寺へ出かけ、秋は庾公楼を登る。或いは詩を一首吟じ、或いは茶を一杯飲む。体も

¹⁷ 『全唐詩』（巻・四六二）

心も束縛するものがなく、広々として何にも載せていない船のようだ。富や身分があっても困る時があり、ずっとあしたのことを心配することが大変だ。反して貧しくて身分も低い人々にも楽しさがあり、それは自由を満喫することである。) ¹⁸

元和十年(815)、白居易は江州司馬に貶謫され、その地で一年を過ごした後書いた詩である。詩の最初は莊子の南華經の教を紹介し、自分も今になってやっとその教え通りの生活ができるようになったという。毎日の食事や睡眠に自然山水の中での散策、そして寺や名所古跡の見学などを淡々とこなし、気が向いている時は詩をつくったり、茶を飲んだりしている。このように無心無事は毎日の生活に穏やかさをもたらしている。江州に流されたことは白居易の一生の中でもっとも大きな挫折である。その喪失感を乗り越えるため、白居易の心は一層道教や仏教に傾き、これらの宗教の信仰と勉強から回復力を得ようとしている。道教の色合いが濃い、「或吟詩一首、或飲茶一甌。」はいかなる制約もなければわざとらしい姿勢作りもない。それは完全に無心で自然な行為であり、心も「虚舟」のように「無」ではあるが、すべてを受け入れる準備もある。この詩の中で飲茶とは無心の茶である。

次の詩はこうした考え方を白居易の日常を描く詩である。

官舎 高樹換新葉、陰陰覆地隅。何言太守宅、有似幽人居。
太守臥其下、閑慵兩有余。起嘗一甌茗、行讀一卷書。早梅結青實、
殘櫻落紅珠。稚女弄庭果、嬉戲牽人裾。是日晚彌靜、巢禽下相呼。
嘖嘖護兒鵲、啞啞母子鳥。豈唯雲鳥爾、吾亦引吾雛。

(官舎 高い木の葉は新緑になり、鬱々として庭を蔭で覆う。このような太守の住まい、どうして隠居の住処と言うだろう。太守は木の下で横たわり、暇を持って余し、くつろいでいる。起きて茶を一杯飲み、庭でゆっくり歩きながら声を出して書を読む。早い梅は青い実を結び、木に残っているサクランボは赤い珠のように庭に落ちる。幼い娘は落ちている木の実で遊び、戯れて大人の服の裾を引っ張る。このような日は夕方になると一層

¹⁸ 『全唐詩』(巻・四三〇)

静かになり、巢にいる鳥は下りて仲間を呼ぶ。カササギの親鳥は小鳥を守り、親子鳥は鳴き声で呼応する。空を飛んでいる鳥だけではなく、私にも幼い子供がいる。) ¹⁹

時は春の五月頃であろうか。場所は太守つまり詩人の家の庭である。変わり変わりに木や鳥、人間の表情と動きが描かれている。まず庭にある木々の描写である。名のない高い木や梅の木、桜の木はそれぞれ初夏の装いである。高い木は静かに庭にいっぱい蔭を落としているし、青い実をつけている梅の木と赤い実をつけているサクランボの木もさりげなく初夏の風情を演出している。そして庭の木や建物に巢を作っている鳥たちも静かな初夏の時間を過ごしている。小鳥と親鳥の鳴き声などでのやりとりもあり、軽やかなストーリーの展開も想像させる。人間の動きは二つのパターンに分けられている。まず庭に落ちているサクランボの実を拾い、大人の服の裾を引っ張って遊んだりしている天真爛漫な幼い女の子の描写がある。そして、庭の情景のすべてを見渡し、心身ともリラックスしている詩人の存在もある。時間はゆったりと流れ、様々な自然な営みものんびりとした雰囲気の中で行われている。「何言太守宅、有似幽人居」一句は白居易の隠居のイメージに対しての反発である。自分は「吏隠」しているつもりでいながら、茶を飲み、詩を吟じ、存分に日常生活を楽しんでいる。

白居易は江州に貶謫される前、すでに仏教とりわけ南宗禅に興味を持っており、仏教教理に関しての著作もあるほどであった。廬山の麓で家を作り、「居士」と自称し始めることも広く知られている。この時期から、彼は南宗禅の一系である洪州宗の弟子たちとの交流を深め、洪州宗の影響をもっとも強く受ける文人の代表となっている。洪州宗は「超越」や浄土観念と対立している。「洪州宗は(平常心が道である)」と主張する。この(平常心)とは(造作なく、是非なく、取捨なし)であり、これから又(無心)であり、(無心が道)なのである。洪州宗の宗徒は(法性空とは即ち一切処に無心なる。是なり)と考える。この一切の是非、計較、追求を放棄した(無心)の境地が即ち白居易の歌頌する委順安閑の(閑適)の心的態度なのである。²⁰ このような考え方から、心に

¹⁹ 『全唐詩』(巻・四三一)

²⁰ 孫昌武著作、副島一郎訳『白居易と仏教、禅と浄土』より

ある禅は衣食住の日常生活の実践に帰し、すべての自然現象や人間の動きに表われていると白居易は考えている。すなわち、上記の詩も日常生活の一コマでありながら白居易なりの洪州禅の精神を実践する一例である。ここにある飲茶は自然現象や日時用生活と同じように「平常心」のひとつであり、白居易のライフスタイルにもなっている「閑適」と「独善」の形式になっている。

そして次の詩も同じ趣旨である。

食後 食罷一覺睡， 起來兩甌茶。 舉頭看日影， 已復西南斜。 樂人惜日促， 憂人厭年賒。 無憂無樂者， 長短任生涯。

(食後 食後にひと眠りし、起きてからは茶を二杯飲む。頭を挙げてお日さまを見れば、すでに西南の方に傾いている。楽しんでる人は日の短さを惜しみ、憂い人は一年の長さを嫌う。悩む事も楽しむ事もないものは、ただ時間の流れに身を任せばいい。) ²¹

悩みのある人と悩みのない人にとっては時間の流れの速さも違うようだが、心を穏やかな状態にすれば、時間が短く感じることも長く感じることもなくなるという。白居易は平常心でいることを選んだ。好きな時に寝て、好きな時に起きる。時間が経つのは全然気にしない様子である。現実をおとしめることもしなければ否定することもしない。毎日毎日の流れに身を任せる。のんびりと茶を飲むことも平常で平凡な日常生活に隙間なく嵌められた一コマである。喫茶法などの見える部分は詩の中で描かれていないし、恐らくそれについて詩人は考えることもしなかっただろう。

そして、おなじように『首夏病間』²² では、「・・・・・・ 移榻樹蔭下， 竟日何所為。 或飲一甌茗， 或吟兩句詩。 内無憂患迫， 外無職役羈。 此日不自適， 何時是適時。」(・・・・ ベッドを庭の木の蔭の下に移し、一日中何をしているだろう。茶を一杯いただくこともあれば、詩を二句吟じることもある。心の重荷となっている心配事や憂い事がなく、体の束縛となってい

²¹ 『全唐詩』(巻・四三〇)

²² 『全唐詩』(巻・四二九)

る役職もない。こういう日に自在自適にしていなければ、とういう日に自在自適ができるであろうか)と綴る。

三、小結

六十首あまりの茶詩を書いた白居易は中唐のみならず、その後の時代の茶詩の作者のなかでも目立つ存在である。ジャンルの異なる茶詩は多方面に渡って後世の茶詩に大きな影響を及ぼしている。白居易の茶の贈答にまつわる茶詩は代々伝えられてゆく名詩となり、茶詩の重要なジャンルのひとつとなった。また、茶が従来持っている抽象的な存在と象徴的なイメージを打破し、具体的に茶の名前をあげて茶詩を作る手法は茶詩の内容をより具体化多彩化させた。そして、白居易の閑適詩に分類することができる日常生活のなかの飲茶を描く茶詩は何より重要な役割を果たしていると思われる。これらの茶詩は茶の固有イメージから出発し、飲茶を描く時、必ずと言っていいほど禅や道教との関わりが見えるような茶詩の書き方を改め、洪州禅の無心な考え方から形式やこだわりのない飲茶を描いている。茶は靈草であり、飲茶は超越的な活動であるという考え方はなくなっている。これは飲茶が庶民レベルまでに普及し、より身近な存在になっている証拠でもある。さらに、白居易の茶詩はその後の茶詩の書き方や内容に大きな可能性と多様な選択肢を与えることになった。